

ポイティンゲル図研究の回顧と現状

田 中 方 男

ポイティンゲル図による地理的論考がはじめて出版されたのは一八六九年、E・デジャルダンが『ポイティンゲル図によるガリアの地理』⁽¹⁾なる一文を草して以来のことである。ポイティンゲル図に関する研究論文ではなく、単にポイティンゲル図そのものについての刊行は、古く一六世紀に遡るが⁽²⁾、一般に市販の地図が比較的容易に入手できるようにした一九世紀には、単にポイティンゲル図のみでなく、これと絶えず比較され、対立しているデオクレティアヌス時代(二四五―三三三)のアントニヌスの旅程表が当時の精巧な印刷術により大量に出回っていたことは想像に難くない。マンネルトの『ポイティンゲルの旅程表』(一八二四)⁽³⁾をはじめ、G・バルタイ、M・ビンデル共編の『アウグスト・アントニヌス旅程表とエルサレム巡歴』(一八四〇)⁽⁴⁾、P・ラビエ『古代旅程表集成』(一八四四)⁽⁵⁾、同じくフォティア・デヘルバンの『古代旅程表集成』(同年)⁽⁶⁾などの出版はキリストの聖地エルサレムへの巡礼や、ヨーロッパ文明の発祥地ギリシアの古代文化遺跡の探訪などに応えたものであり、E・デジャルダンが一八六九年にウィーンに保管されている現物に基づく『ポイティンゲル図』を複製したのも右の世相を反映したものとみてよい。一方、K・ミラーもまたポイティンゲル図に

よる古代ローマの道路図たる『イディネラリア・ロマーナ』⁽⁷⁾の粗描を一八八七年に出版している。彼はその翌年『ポイティンゲル図と名付けられたカストリウスの世界地図』⁽⁸⁾を著わし、さらに一八九七年には『ポイティンゲル図の歴史について』を発表した。これらは一冊本にまとめられ、一九六二年に『ポイティンゲルの道路図』⁽⁹⁾と題して刊行された。二〇世紀に入ると地理学、地質学、考古学などの発達と相まって、ポイティンゲル図の地名研究も、単に机上の観念的解釈にとどまらず、自然界の実証的検証の段階へと向い、研究対象の地域的範囲も一九世紀におけるローマ帝国全域の概括的研究から国別、地方別、小地域別へと細分化の傾向を辿るにいたる。⁽¹⁰⁾ C・ジュリアンの『ポイティンゲル図におけるガリア』(一九二二)⁽¹¹⁾をはじめ、R・ミューラーの『ポイティンゲル図よりみたライン地方・オランダ・ベルギーの地理』(一九二四)⁽¹²⁾、E・ボラッシュェクの『ドナウ川下流域の地理学的資料としてみたポイティンゲル図とアントニヌス旅程表』(一九三六)⁽¹³⁾、K・クロン、H・ヘテマ⁽¹⁴⁾などの『ポイティンゲル図によってみたネーデルラント研究』⁽¹⁵⁾、フォン・フリイターク・ドラツベの『ポイティンゲル図新考』(一九三八)⁽¹⁶⁾など多くの論考がつきつきと発表された。この時期の特徴を一口にいえば、ブトレマイオスの世界地図やアントニヌスの旅程表などの比較研究による、ポイティンゲル図に欠けたローマンタウンやローマンロードを補足することにより、ガリアのみならず、その周辺部、北アフリカ、ギリシア、トルコ、パレスチナ方面にまで研究領域を押しひろげたものであるといえよう。

第二次大戦後は、かかる比較研究による実証的研究を考古学、地

質学など土地に関する実証科学のみならず、いわば、さまざまに心象の凝集的表现を科学化した社会学・言語学などをも補助学として採り入れ、殊に地形学を踏まえての局部的地形を検討する段階に到達したとみることが出来る。O・ロステインが地名学上からこの種の旅程表はもとより、地名一般について広く言語学的立場からの考察をおしすめ、古代ローマ時代のラテン語地名と現代都市名との対比を試みたのも、かかる歴史地理学的研究の動向を反映したものであるといつてよい。かくてポイティンゲル図の研究も、一方においてはM・A・ウアンサンの『フランスの地名研究』(一九三七)^①の方法論的体系を踏まえたM・ネーグル神父の『フランスにおける地名研究』(一九六三)^②、同『フランス地名辞典』(同年)の刊行により一段と解明の度を加えることとなった。ちなみに、後者の辞典は戦後『固有名詞国際評論』を主宰したM・ドーザーの業績^③を土台としたネーグル自身の手になるものであった。

他方、一九五一年にはイギリスの社会学者、R・ディッキンソンが『西欧の都市』^④を地理学的視野から解明したことにより、多大の反響を呼んだ。彼は殊に中世都市の形成過程を教会・市場・公共建物・町並・要塞・城壁などを構成要素とする都市形態の面から考察をすすめ、これらの構成要素のいずれかが都市形態の形成過程において、動態的因子として作用する諸事例をあげ、都市プランの諸類型を設定した。かくして古代都市の形態的諸特徴を指向する社会的術語の内容把握をより闡明にするが、これらの解明の成果はポイティンゲル図記載の都市名の微地形的位置比定に今後大いに役立つであろうと思われる。さらにまた、考古学の立場からはイギリスの

地理学者でもあるI・D・マーガリーがイギリス考古学審議会の支援のもとに、七千マイルに及ぶ緊急かつ重要な道路の調査計画として、ローマンロードを隈なく踏査し、その最盛時代の道路網の状況および土木技術上の構造を明らかにした。その研究の成果は、一九五五年に『イギリスにおけるローマン・ロード』^⑤と題して発表された。氏の二万マイルに及ぶ調査旅行は直接ポイティンゲル図を参考としたものではなく、アントニヌス旅程表とオードナンス・サーヴェイ・マップ(陸地測量局発行地図)によるものであるが、著者自らの手になる道路地図、および航空写真各一七枚と、付録のアントニヌス旅程表によるローマ・マイルと英国マイルとの対比は間接的にポイティンゲル図研究史に光を投じたものといえよう。

わが国において、いち早くポイティンゲル図をイギリスの現景観の地理的解釈の中にとり入れられたのは藤岡謙二郎博士であった。博士はイギリス滞在中にスコットランドにまで足を伸ばされ、ロマン・ロードとタウンを遍歴し、その目々の記録をもとに地理学出身の考古学者クロフォードなどの歴史地図をも参考として、ポイティンゲル図の交通路をオードナンス・サーヴェイ・マップに記入され、ローマン・タウンの分布や局部的位置と町割を主にした歴史的景観と現景観との対比を試みられた。これらの成果は一九五九年に雑誌『史林』(四二巻四号)^⑥に「イギリスにおけるローマン・タウンの歴史地理学的性格——その分布・位置と町割を主にしてみた場合——」と題して発表された。^⑦

その後、同博士は『都市文明の源流と系譜』(鹿島研究所出版会、一九六九)の中にポイティンゲル図の写真版の掲載と共に解説をも

下され、ポイティンゲル図研究へののがかりに大きな足跡を残された。博士の研究はひとりローマン・タウン、ローマン・ロードといわず、律令古代の七道や、その地方政庁たるや国府や駅家都市の如く幹線道路や、これに近く配置された地方都市、さらに江戸時代の旧五街道と宿場町など、現代にまで踏襲されている古代交通路や歴史的都市を時の断面においてとらえた歴史的景観と現景観との対比のもとに世界的視野から考察されたものであり、従来等閑に付されていたポイティンゲル図研究におけるわが国歴史地理学界に注意を喚起されたものとして注目される。

さて、最近のポイティンゲル図に関するものとしては通史的ではあるが、織田武雄博士の『地図の歴史』（講談社 一九七三）、それ守一博士の『都市図の歴史・世界編』（講談社 一九七五）にそれぞれカットを添えた紹介がなされている。一方、フランスではトゥール大学のR・シュヴァリエの『ローマン・ロード』（一九七二）²⁸の考古学的労作が注目を惹く。氏はポイティンゲル図について「ポイティンゲル図は古代の地図の中世写本であり、後世の編集になることが問題である（傍点筆者）……誰しもポイティンゲル図のみを研究しはしないだろう（同上）……確かに誤りが多い。殊に数字（宿駅間距離を示すローマ数字——筆者注）に関しては」と述べ、「本図を訂正する前に他の旅程表のデータとポイティンゲル図とを比較して自然のままの状態にまず興味を抱くだろう（同上）」²⁹とも述べられている点はポイティンゲル図に関する限り、取り組み方が充分であるとはいえないように思われる。つまりポイティンゲル図が中世の写本であれ地図製作者の意図する目

的と関心の強弱によって描かれる内容が取捨選択された上での自然のままの状態を氏は肯定されているのであってこの点は動かないのである。他方、アメリカのプリンストン大学から出版された『古典時代遺跡百科辞典』（一九七六）³⁰は注目されてよい。同辞典は紀元前七五〇年より紀元五六五年に及ぶ考古学的業績の集大成で、一六世紀以降の現地調査者三七五名の報告書を要約した千頁をこえる大冊であるが、ポイティンゲル図記載のラテン語地名は試算によればガリア（小稿ではトランス・アルピナ）については左表の如くわずかにその三分の一が登載されているにすぎない。

現代国名	本書記載	ポイティンゲル図記載の地名	本書記載のラテン語地名	本書記載のポ図地名
フランス	四六六	三〇四	一五九	一一五
オランダ	六七	三〇	三〇	一一
ベルギー	三〇	二二	二〇	一四
スイス	四六	三五	三〇	一一
西ドイツ				

以上、ポイティンゲル図の研究史を概観したが、ローマントウンやローマンロードの研究には、ひとりアントニヌスの旅程表といわず、これと常に比較研究されてきたポイティンゲル図が絶えず問題となり、およそ一世紀にも亘って多くの論考が発表されてきたことが明らかとなったが、未だポイティンゲル図そのものの古代地名が全て解明されたわけではない。今後、これらの地名の現地比定をもとめ、現代都市の如何に多くがガロ・ロマン時代の古代都市からの

踏襲発展によるものであるかを時の断面において検証を進めてゆくことこそは現代の歴史地理学における一つの課題であるといわねばならない。

〔付記〕 小稿は『藤岡謙二郎先生退官記念論文集』に掲載予定の拙稿「ポイテイングル図に現われたローマン・タウン（ローマンロードを含む）研究の回顧とその方法的考察——ガリアの場合——」の前段をなすものである。藤岡先生に感謝をこめてお捧げいたします。

注

- ① Desjardins, E. : Géographie de la Gaule d'après la Table de Peutinger. Paris, 1869. Chevallier, R. : Les Voies Romains. Paris, 1972. P. 247
以下、資料〔C〕と略記する。
- ② 一五九八年初版が刊行され、一六一八年のベルタイウス版によってポイテイングル図は一般に認められるようになる。田中芳男「フランスにおけるローマンロードと歴史的都市についての若干の考察」『明石菟大研究紀要 六』一九七六 三二頁
- ③ 織田武雄『地図の歴史』講談社、一九七三 一八三―一八四頁
- ④ Mannert : Tabula itineraria Peutingeriana. Leipzig, 1824. 資料〔C〕二四七頁
- ⑤ Parthey, G.; Pinder, M. : Itinerarium Antonini Augusti et Hierosolymitanum. Berlin, 1840.
資料〔C〕二四七頁
- ⑥ Lapie, P. : Recueil des itinéraires Anciens

comprenant l' Itineraire d'Antonin, la Table de Peutinger et un choix des périples grecs.
Paris, 1844.

資料〔C〕同上

- ⑦ Fortia d' Urban 注⑥の書名と同じ
- ⑧ 一七三七年以来、ウィーンの王室（現国立）図書館が保管している幅三〇センチメートル、長さ七メートルという細長い羊皮紙の案内図 矢守一彦『都市図の歴史・世界編』講談社 一九七五 三五頁
- ⑨ Desjardins, E. : La Table de Peutinger, d'après l' original conservé à Vienne. Paris, 1869-1874 資料〔C〕同上
- ⑩ Miller, K. : Itineraria Romana, vöm. Reise- wege an der Hand der T. P. dargestellt, 1^{re} éd. 1887, 2^e éd. Stuttgart, 1916. 資料〔C〕
- ⑪ Miller, K. : Die Weltkart des Casuorius genannt die Peutingersche Tafel, Stuttgart, 1888.
- ⑫ Miller, K. : Die Peutingersche Tafel. Stuttgart. 1962.
- ⑬ Jullian, C. : La Gaule dans la Table de Peutinger, la Revue des études anc., XIV. 1, 1912.
資料〔C〕
- ⑭ Mueller, R. : Die Geographie der Peutingershen

- Tafel in der Rheinprovinz, in Holland und Belgien, Geog. Anzeiger, Vol. 9, Nr. 10, 1926. (et Gotha, 1966) 資料〔C〕
- ㉔ Polaschek, E. : Die Tabula Peutingeriana und das Itinerarium Antonini als topographische Quellen für Niederösterreich. Jb. für Landeskunde von Niederösterreich, Nr. 26, 1936.
- ㉕ Kroon, K. : Het nederlandsche gedeelte van de Tabula Peutingeriana, Tijdschr. Nederl. Aardrykskgenootsch., 52, 1935.
- ㉖ Hettema, H. : Nog eens het Nederlandsch gedeelte der T. P. : *ibid.*, 53, 1936.
資料〔C〕 四九頁
- ㉗ Von Frijtag-Drabbe (C. A. J) : Die Peutingerkarte in der Licht der neuesten Untersuchungen, C. R. du Congrès intern. de Géogr., Travaux de la section IV. Amsterdam, 1938 資料〔C〕
- ㉘ Rostaing, C. : Les Noms de Lieux, P. U. F. <Que sais-je?>, Paris, 11^e éd., 1945 ; 8^e éd., 1974 以下資料〔B〕に略記する。
- ㉙ ㉚ ㉛ Vincent, M.A. : La Toponymie de la France. Bruxelles, 1937 以下省略。資料〔B〕七三、四四、五五各頁
- ㉜ Dickinson, R. E. : The West European City, a geographical interpretation. London, 1st ed. 1951., reprinted, 1968 三〇一～三三三頁
- ㉝ Margary, I. D. : Roman Roads in Britain. 3rd ed, London, 1973
- ㉞ 前掲(㉞)は一九六七年改訂版により上・下二冊は一冊本にまとめられ、旧版のものに航空写真七葉を追加収録している。
- ㉟ この論文は翌年出版された藤岡謙二郎『都市と交通路の歴史地理学的研究』大明堂 一九六〇の第三編付論第二章に改めて収録されているものである。
- ㊱ 前掲(一)の資料〔C〕
- ㊲ 資料〔C〕 三三～三七頁
- ㊳ The Princeton Encyclopedia of Classical Sites, ed. R. Stillwell, Princeton University Press, 1976.